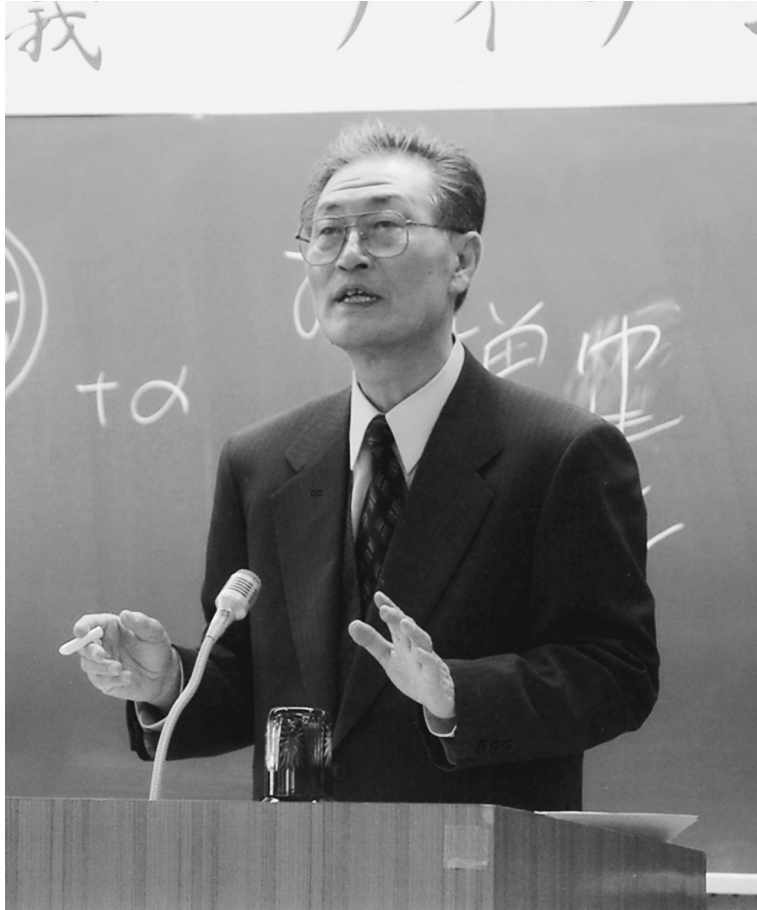


Title	里見軍之名誉教授 近影・略歴等
Author(s)	
Citation	メタフユシカ. 2004, 35(2), p. 3-9
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/6360">https://doi.org/10.18910/6360</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



里見軍之名誉教授近影

## 里見軍之名誉教授 略歴

昭和 15 年 12 月 11 日 岡山県に生れる  
昭和 40 年 3 月 大阪大学文学部哲学科卒業  
昭和 42 年 3 月 大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻修士課程修了  
昭和 42 年 4 月 大阪大学文学部助手  
昭和 46 年 3 月 同上 辞職  
昭和 46 年 4 月 立命館大学経済学部助教授  
昭和 50 年 9 月 同上 辞職  
昭和 50 年 10 月 大阪大学文学部助教授  
昭和 63 年 6 月 大阪大学文学部教授  
平成 元年 5 月 文学視学委員（高等教育局）（平成 9 年 3 月まで）  
平成 元年 6 月 文学博士（大阪大学）  
平成 10 年 4 月 大阪大学評議員に併任（任期 2 年）  
平成 11 年 4 月 大阪大学教授大学院文学研究科に配置換  
平成 16 年 3 月 定年退職  
平成 16 年 4 月 大阪大学名誉教授

## 里見軍之名誉教授 研究業績等一覧

### 著書

- 1 『社会の哲学』(共著) 昭和50年9月 学文社
- 2 『歴史の哲学』(共著) 昭和55年4月 北樹出版
- 3 『哲学の諸問題』(共著) 昭和59年4月 晃洋書房
- 4 『現象学と方法の問題』(単著) 昭和63年3月 大阪大学文学部紀要、第27巻
- 5 『ドイツ観念論とディアレクティク』(編著) 平成2年11月 法律文化社
- 6 『現代思想のトポロジー』(編著) 平成3年3月 法律文化社
- 7 『哲学基本事典』(編著) 平成4年4月 富士書店
- 8 『知と行為』(共著) 平成5年12月 ミネルヴァ書房
- 9 『現代哲学の潮流』(編著) 平成8年7月 ミネルヴァ書房
- 10 『自然のなかの人間』(編著) 平成13年2月 大阪大学文学研究科広域文化形態論講座
- 11 『コミュニケーションの存在論』(編著) 平成13年3月 科学研究費補助金研究成果報告書

### 論文

- 1 フッサールの「志向性」理論(単著) 昭和43年12月 『待兼山論叢』第2号
- 2 フッサールにおける認識論的なものと形而上学的なもの(単著) 昭和47年10月 『現象学研究』第1号
- 3 「意識の現象学」についての一考察(単著) 昭和48年12月 『立命館文学』第341/342/343合巻号
- 4 フッサールの時間論(1)(単著) 昭和54年3月 『哲学論叢』第4号
- 5 フッサールの時間論(2)(単著) 昭和54年11月 『哲学論叢』第5号
- 6 フッサールの時間論(3)(単著) 昭和55年10月 『哲学論叢』第7号
- 7 「現象学的還元」考(単著) 昭和58年11月 『哲学論叢』第13号
- 8 高橋哲学について(単著) 昭和60年11月 『哲学論叢』第16号
- 9 純粹論理学と超越論的論理学(単著) 昭和62年12月 『哲学論叢』第18号
- 10 カント図式論の射程(単著) 平成元年12月 『哲学論叢』第20号
- 11 ハイデッガーのカント解釈(単著) 平成元年12月 『待兼山論叢』第23号
- 12 理想主義者フッサール(単著) 平成3年11月 『現象学年報』第7号
- 13 第三批判の体系性(単著) 平成4年1月 『立命館文学』第522号
- 14 生と学とフッサールのディルタイ批判(単著) 『アルケー—関西哲学会年報』第1号
- 15 主観的目的論の帰趨—カントとフッサール(単著) 平成8年1月 『現象学年報』第11号
- 16 超越論的哲学の可能性—カント哲学の位置づけ(単著) 平成10年3月 『メタフィシカ』第2号

- 17 感情論素描(単著) 平成 10 年 3 月 『感情の解釈学的研究』(科学研究費補助金研究成果報告書)
- 18 純粹経験について(単著) 平成 11 年 12 月 『待兼山論叢』第 33 号
- 19 生活世界と科学技術(単著) 平成 16 年 2 月 『科学と社会』(科学研究費補助金研究成果報告書)

#### その他

- 1 フッサールの受動的総合の理論(要旨) 昭和 45 年 9 月 『関西哲学会紀要』第 10 号
- 2 心身関係論(要旨) 昭和 47 年 2 月 『立命館経済学』第 20 号
- 3 哲学的人間学(クーン)(共訳) 昭和 54 年 6 月 白水社
- 4 伝統を近寄せること(ローディ)(翻訳) 昭和 62 年 12 月 『哲学論叢』第 18 号
- 5 ウィーン学団(クラフト)(共監訳) 平成 2 年 9 月 富士書店
- 6 「記述」「形相」「理念」 平成 2 年 9 月 『岩波哲学・思想事典』

#### 学会発表

- 1 フッサールの受動的総合の理論 昭和 44 年 10 月 関西哲学会第 22 回大会  
一般研究発表 天理大学
- 2 カントと超越論的現象学 昭和 62 年 11 月 日本カント協会第 12 回大会  
シンポジウム提題 東京大学
- 3 学と生と—フッサールのディルタイ批判— 平成 4 年 11 月 関西哲学会第 45 回大会  
委嘱による発表 高知大学
- 4 主観的目的論の帰趨—カントとフッサール— 平成 6 年 11 月 日本現象学会第 16 回  
大会 シンポジウム提題 神戸大学
- 5 超越論的哲学の可能性—カント哲学の位置づけ— 平成 8 年 11 月 日本カント協会  
第 21 回大会 シンポジウム提題 愛知学院大学

#### 講演

- 1 Japanese View of Nature 平成 15 年 10 月 State Univ. of New York at Buffalo
- 2 哲学の現在(シンポジウム「人文学の現在」提題) 平成 15 年 11 月 大阪大学大学  
院文学研究科

## 里見軍之名誉教授 功績覚書

里見軍之名誉教授は、昭和40年3月大阪大学文学部哲学科を卒業し、同年4月同大学大学院文学研究科修士課程に入学、哲学を専攻し、昭和42年3月同課程を修了した。同年大阪大学文学部助手に採用され、昭和46年同助手を退職した。その後同年4月立命館大学経済学部助教授に採用され、昭和50年9月に退職した。つづいて同年10月大阪大学文学部助教授に採用され、同時に大学院文学研究科担当を命ぜられ、昭和63年6月に同教授に昇任、同9月には文学博士（大阪大学）の学位を授与された。平成11年4月大学院重点化に伴い、同大学大学院文学研究科に配置換となり、平成16年3月31日付けで定年退官した。

同教授は、現象学とりわけフッサールの現象学を、哲学史のコンテクストにおいてその歴史的な位置づけと現代的な意義とを明らかにすることを研究課題としてきた。第一に、ドイツ観念論の伝統では、現象を絶対者との関係において位置づけるのに対して、現代の現象学は、神なき時代において如何にして内なるアプリアリなものをも提示しうるのか、という問題設定の転換を図ったものとして捉えた。そして現象学を、神学的な体系からより科学的な体系への変換を図る試みとして明らかにした。第二に、19世紀末から20世紀初めにかけての、集合論の形成や相対性理論の登場する所謂科学の危機の時代、あるいは他方では、自然科学の隆盛に伴う精神科学の危機の時代において、哲学がこの事態に如何に対応したかという視点から、新カント派、生の哲学、実証主義、経験批判論、数学基礎論などに応答し、また対決するところから現象学が形成されたと捉えて、その形成史を明らかにした。第三として、現代哲学の可謬主義的、相対主義的潮流のなかにあつて、あくまで基礎づけ主義という基盤を守りつつも、現象学は解釈学の考え方をとりいれて旧式の意識中心主義的、独我論的な超越論的哲学から脱皮すべきことを説いた。第四には、現代現象学形成史という問題意識から、フッサールとハイデガーとの師弟関係を研究し、フッサールが論理学の基礎づけにおいて取り上げた考え方と道具立てをハイデガーが方法論として整備、明示化し、このハイデガー的現象学から刺激を受けて後期フッサールが自己の見方を自覚し使用したという解釈を提案して、脈絡の掴みにくい両者の相互関係を読み解いた。第五には、「時間」というテーマについて、時間または歴史と永遠というような形而上学的な問題設定によるのではなく、時間をあくまで相互主観的、規約的な媒介変数として捉えることによって、従来の時間論の無用な混乱を避けることができるという見方を提示した。こうした幅広く透徹した研究は斯界に大きな反響をよぶとともに、現象学研究の水準を高めたものとして注目されることとなった。

以上のように同教授は近現代哲学史および現象学研究に積極的に取り組み、学界に大きく寄与したのであるが、その精緻なテキスト解釈と、どこまでも哲学の学問性に深く迫ろうとする真摯な研究姿勢はその該博な知識とあいまって後進の者達に強く影響を与え、教育および研究指導においても顕著な成果を挙げ、多くの優秀な研究者を育ててきた。また、積極的な論文指導および審査、研究室の機関紙『哲学論叢』『カンティアーナ』の編集・発行、科学研究費補助金による共同研究の組織、広域文化形態論講座主宰の共同研究の推進等を通じて、研究室の運

営全体にもその指導力を発揮し、それにより哲学哲学史専門分野はその伝統を継承、発展させ、日本における現象学研究の拠点として高く評価されるようになったことは衆目の一致するところである。

一方、学内においては、管理運営に関しても同教授は、一貫して誠実に職務を果たしてきた。大学全体の組織活動においては、評議員、広報委員会、制度委員会、自己評価委員会、同和委員会等の委員を務め、学部・研究科内においても、計画委員会委員長、庶務委員会、教務委員会、国際交流委員会、大学院委員会等の委員として真摯に活動してきた。

他方、学外においては、関西哲学会、関西倫理学会、日本現象学会、日本フィヒテ協会等の委員として学界における指導的役割を果たしてきた。また、文部省文学視学委員会委員、大学基準協会基準委員会委員、国立高等専門学校教員選考および教員資格認定に関わる論文審査協力者等として社会的に貢献してきた。

(文、入江幸男)